エピソード１：子どもの「困り感」

私たちの使命は「一人ひとりに相応しい療育の働きかけ」をすることだと思って日々取り組んでいます。そのためには、まずは一人ひとりの個性や特性、ありのままの子どもの姿を理解することが必要ですが、それに加えて子どもがどんな「困り感」を持っているのか知りたいと思っています。

ずいぶん前の話ですが、我が子がまだ保育所に通っていたころのことです。年長さんになると竹馬乗りを披露したり、リレー競技があったり種目もレベルアップします。そのリレーでのこと、輪っかのバトンを受け取ったわが子は、なんとトラック（といっても園庭ですから小さなトラックです）の中を一直線に走り、ぶっちぎりで一番に次の子にバトンパスをしてしまいました。「えっ？あれっ？」なんだか狐につままれたような気分で、呆然としたのを覚えていますが、その後どうしたのかは全く記憶にありません。そんな突拍子もないことを平然とやってしまう我が子には、度々腹を立てたり、情けないと嘆いたりしました。周りの方たちに頭を下げて回ることも多く、私にとっては「手のかかる子」「育てにくい子」であったと思います。

しかし、子育てもひと段落した今、相変わらず手はかかるけど心優しい青年に成長した我が子を見ると、あの時本当に困っていたのは私ではなくて子どもの方だったのだろうと思うと申し訳ない気持ちでいっぱいになります。

さて、「みらい塾」でも、「困った場面」に遭遇することがあります。子どもは「困っていること」を上手く表現できず、すぐに行動に移してしまうことがあるのですが、「みらい塾」では、それは子どもからのサインと受け止め、どうやったら「最後まで頑張れるかな？」「一緒に楽しめるようにするためにはどうしたらいいだろう？」などと、みんなで知恵を出し合いながら日々考えて取り組んでいます。実は、支援方法を考えたり、工夫したりしている時は楽しい時間でもあります。

『育児=育自』とはよく言ったもので、まさに子ども達からたくさんの気づきや学びをもらっています。子ども達に感謝ですね。